

令和7年度版「学力向上ポートフォリオ(学校版)」【島小学校】

⑥	次年度への課題と学力向上策
知識・技能	デジタル学習が適した児童と、書くことが習熟につながる児童が混在しており、どちらか一方を選択することが難しいことがわかった。デジタル教材によるスタディ・ログのよさ、ドリルやプリント等に書いたものを教師が見取り指導することのよさのバランスについて考えていき、より一層、児童の基礎・基本の定着、習熟を図っていききたい。
思考・判断・表現	活動の中に必要に応じてICTの活用(共同編集(Canva等)、オクリンク等)を位置付けることで、協働的な学びを通して考えたり、表現したりする方法を身に付け、力を発揮できる児童が増えた。一方で、ICT活用能力に差があるため、タイピングがなくてもできる方法や個の能力に応じた方法を検討、取り入れることで、ICTを活用した協働や、表現する機会をさらに増やしていきたい。

①	今年度の課題と学力向上策	
	学習上・指導上の課題	学力向上策【実施時期・頻度】
知識・技能	<学習上の課題> 多くの児童で、基礎的・基本的な知識・技能の定着に課題がみられる。(特に、漢字や計算) <指導上の課題> 児童が反復・習熟に取り組む時間が十分に確保されていない。	⇒ ・低学年は「ドリルパーク」中学年・高学年は、「スタサブ」を活用し、漢字や基本的な計算等の反復・習熟に取り組む時間を確保する。 【週3回以上の授業での実施、宿題、朝の時間の活用】 ・児童の学習履歴を確認し、個別に学習計画を立てる時間を設定する【月に1回程度】。
思考・判断・表現	<学習上の課題> 令和6年度さいたま市学習状況調査における国語・算数・理科の「思考・判断・表現」の記述式問題の正答率が低い。 <指導上の課題> 授業で児童が自己表現する場面が少なく、それに対する手立てが十分に組まれていない。	⇒ ・活動の中に必要に応じてICTの活用(共同編集(Canva等)、オクリンク等)を位置付け、協働的な学びを通して考えたり、表現したりすることができるようにする。【低学年:学期に1回程度から増やしていき、3学期には単元に1回程度、高学年:単元に1回程度】

⑤	評価(※)	学力向上策の実施状況
知識・技能	B	宿題や週3回以上の授業だけでなく、自習や自主学習等で「ドリルパーク」や「スタサブ」を活用して習熟を図る児童の様子が見られたが、書くことで習熟を図りたい児童もいるため、デジタルだけでなく、ドリルやプリントなど実際に書く活動も取り入れ、多面的に習熟を図っていくことができた。
思考・判断・表現	B	ICTの活用(共同編集(Canva等)、オクリンク等)を位置付けたことにより、発達段階に応じた様々な取り組みがなされ、個別最適な学びから協働的な学びへの効果的なつながりや、それで得た学びを通して考えたり、表現したりする方法を身に付け、力を発揮できる児童が増えた。

※評価 A 8割以上(達成) B 6割以上(おおむね達成) C 6割未満(あと一歩)

②	全国学力・学習状況調査結果について(分析・考察)	
知識・技能	・国語では、示された言葉を漢字で書く問題に課題がみられた。同音異義語が複数ある言葉のため、正しい漢字を選んで書くことができなかったと考えられる。また、無回答児童がおおよそ7%あり、苦手としている児童が多いことが伺える。 ・算数では、数直線上に示された数を分数で書く問題に課題がみられた。解答類型を見てみると、数直線上でひとつのめもりに着目し、分数を単位分数のいくつ分として捉えることができなかった児童が約73%と非常に多くみられた。0~1までのめもりがいくつに分かれているか(分母)は理解しているが、0~2までになると分母が正しく読み取れなくなってしまうたり、分母を0~2のめもりの数で捉えてしまったりすることが原因だと考えられる。	
思考・判断・表現	・国語では、目的に応じて文章と図表などを結び付けるなどして必要な情報を見付けることができるかどうかをみる問題に課題がみられた。解答類型を見てみると、いくつかの資料から自身の考えを伝えるための理由を選んだり、出された条件を満たしたりすることができなかった児童がおおよそ29%いた。 ・算数では、分数の加法について共通する単位分数を見いだし、加数と被加数が共通する単位分数のいくつ分かを数や言葉を用いて記述できるかどうかをみる問題に課題がみられた。解答類型を見てみると、共通する単位分数をみつけ、それぞれいくつ分になるかをたづねて考え、説明することが不十分であった解答が多く見られた。	

- ①結果分析(管理職・学年主任等)
②詳細分析(学年・教科担当)

④	さいたま市学習状況調査結果について(分析・考察)	
知識・技能	・算数では、基準量と比較量に着目し、式に合う問題の正しい組み合わせを選ぶ問題に課題が見られた。解答類型を見てみると、正しい組み合わせを選ぶことができた児童は34.7%と低いが、片方だけが正答である児童については、1kgの棒の長さを求める問題を選んだ児童は54.2%、ひもの長さを比較し、何倍であるかを求める問題を選んだ児童は72.9%であることから、基準量と比較量に着目する問題の解決への課題はあるものの、問われ方によっては正しい解答ができる力があると考えられる。 ・理科では、乾電池の直列つなぎについて、正しいつなぎ方とはたらきを理解しているかについて問われた問題に課題が見られた。解答類型を見ると、直列つなぎの正しいつなぎ方とはたらきについて正答した児童は約35%であるが、並列つなぎと直列つなぎのはたらきを理解していなかったり、乾電池の向きの違いに気付いていない児童が正答した児童と同等程度おり、また、電気の通り道を「回路」と正答できた児童が32%であることから、実験の楽しさが優位となり、理科としての知識が十分に身に付いていないと考えられる。	
思考・判断・表現	・国語では、相手に伝えるように理由や事例などを挙げながら、話の中心が明確になるよう話の構成を考える問題に課題が見られた。解答類型を見てみると、スピーチAとBを比較し、アドバイスによりどのような変化があったかを見取ることができなかった児童が72.3%と非常に多かった。「はじめに」や「問いかけやよびかけ」などの言葉の意味を、この問題を解答する上で必要な意味でとらえることができなかったためだと考えられる。 ・算数では、整数倍にあたる2つの数量関係の場面と図を関連付ける問題に課題が見られた。解答類型を見てみると、もとにする数を「1」としてとらえることはできているが、整数倍されたときにいくつになるかよりも、何倍したかに着目して解答した児童が、正答した児童の割合より多かった。「倍」という言葉に引っ張られて2本の線分図の長さのみに着目したり、問題文で示された数字に着目してメモりの数字のみを頼りに解答したりしていると考えられる。	

③	中間期報告		中間期見直し
	評価(※)	学力向上策の実施状況	学力向上策【実施時期・頻度】
知識・技能	B	低学年は「ドリルパーク」中学年・高学年は、「スタサブ」を活用し、漢字や基本的な計算等の反復・習熟に取り組むことができた。また、児童の実態に合わせて学習計画を立てながら学習活動を進めることができた。	デジタルだけでなく、ドリルやプリントなど実際に書く活動も取り入れ、多面的に習熟を図っていく。【週3回以上の授業での実施、宿題】
思考・判断・表現	B	活動の中に必要に応じてICTの活用(共同編集(Canva等)、オクリンク等)を位置付けることで、協働的な学びを通して考えたり、表現したりする方法を身に付け、力を発揮できる児童が増えてきた。校内研修を通して引き続き実践力を磨き、児童に還元していきたい。	変更なし

※評価 A 8割以上(達成) B 6割以上(おおむね達成) C 6割未満(あと一歩)

令和8年度版「学力向上ポートフォリオ(学校版)」【島小学校】

学力向上
アクションマップ

①	今年度の目標と学力向上策	
重点的に育成する 資質・能力	(1)基礎学力を高めるために必要な資質・能力 (2)自分の考えをもち、表現することができる資質・能力	
↓		
実施する学力向上策 【時期・頻度】	(1)自分の学びの深まりや疑問、学び方についてふり返る時間と、習熟の時間の設定。 【授業末または単元末】 (2)問題の答えを求めるとき、その答えになる理由や考え方などについて、児童が筋道を立てて説明しあう授業の実施。【各単元の中で1回以上】	

⑤	年度末評価	
学力向上策の 実施状況	評価(※)	①結果分析(管理職・学年主任等) ②詳細分析(学年・教科担当) ③分析共有(児童生徒の実態把握) 調査委員会・校内研修会
↓		
今年度の成果と 次年度の課題	結果提供(2月)	

※評価 A 8割以上(達成) B 6割以上(おおむね達成) C 6割未満(あと一歩)

②	全国学力・学習状況調査結果の分析	
特徴的な結果	・国語の「引用して自分の考えが伝わるように書き方を工夫することができるかどうかをみる」問題に課題がみられた。 ・算数の「二次元の表から条件に合う数を読み取ることができるかどうかをみる」問題に課題がみられた。	
↓		
結果から考えられる 児童生徒の実態	重点的に育成する資質・能力「基礎学力を高めるために必要な資質・能力」と関連する、長文の要点を読み取ったり、情報を整理したりする力に課題がみられる。また、「自分の考えをもち、表現することができる資質・能力」については、自分の考えを伝えたり、筋道を立てて説明したりする力に課題がみられる。	

④	さいたま市学習状況調査結果の分析	
特徴的な結果	さいたま市学習状況調査(5月)結果分析(管理職・学年主任等)	
↓		
結果から考えられる 児童生徒の実態	①学校全体での取組 ②単元テスト・定期テスト等の分析・活用 ③中間評価を経た取組 ④調査結果を活用した授業	

③	中間評価	
学力向上策の 実施状況	評価(※)	(1)自分の学びの深まりや疑問、学び方についてふり返る時間が十分にとれないことがあり、学びの自己調整に課題が残る。 (2)「協働的な学び」の実現に向け、その方策のひとつとして児童が自分の考えについて筋道を立てて説明しあう授業を行うことができた。
	B	
↓		
学力向上策の 見直し	変更なし	

※評価 A 8割以上(達成) B 6割以上(おおむね達成) C 6割未満(あと一歩)

ざらざら(楕円)

児童生徒の
学力の向上

教育研究所